

# 果樹生産の歴史的・文化的背景

ニシンとリンゴの不思議な関係・・・北海道余市町の事例

これは何？



2004 5/3

【第三種郵便物認可】

北海道・増毛町

## ニシン半世紀ぶり豊漁

### 列島 寒暖計

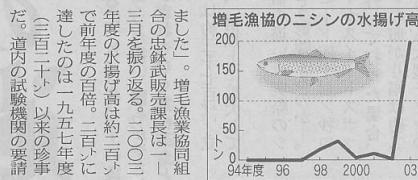
各社が目指す  
新たな観光  
資源として相次ぎツアーや  
企画を打ち出している。

「今日ほどのぐらいニシ  
ンが捕れたか」という町か  
らの問い合わせが結構あり

### 繁栄の歴史に脚光 道内外から



ニシン豊漁に沸いた増毛町は新たな観光地として注目をあび始めている



に育成した」(同社)  
シイビーツアーズ(札  
幌市)は、毎月末までに増毛町  
への日帰りツアー「札幌町  
着の大人口五百回」を計  
二十五回催す。従来は主に  
道内観光客に販売してきた  
が、前年同期の二倍以上に  
回数増やし、東京・大阪・  
名古屋の觀光客が公共機  
関にもハーフレットを置い  
てアピールを始めた。

北海道のニシン漁は明治  
時代に大産業化した。  
戦後は激減したが、増毛町にはJR増毛  
駅通りを中心に漁が盛ん  
だった当時の商家や旅館  
学校が残る町は駅前通り  
を「ふるさと歴史通り」と  
称して街灯や石畳の整備を  
進めており、旅館各社のソ  
ラーニングティアの案内でも  
ボランティアを訪ねるが、地元  
などを訪ねニシン漁の歴史  
や文化を学び、地元で捕れ  
たタコやワカサギなどを味わえ  
るようになる。



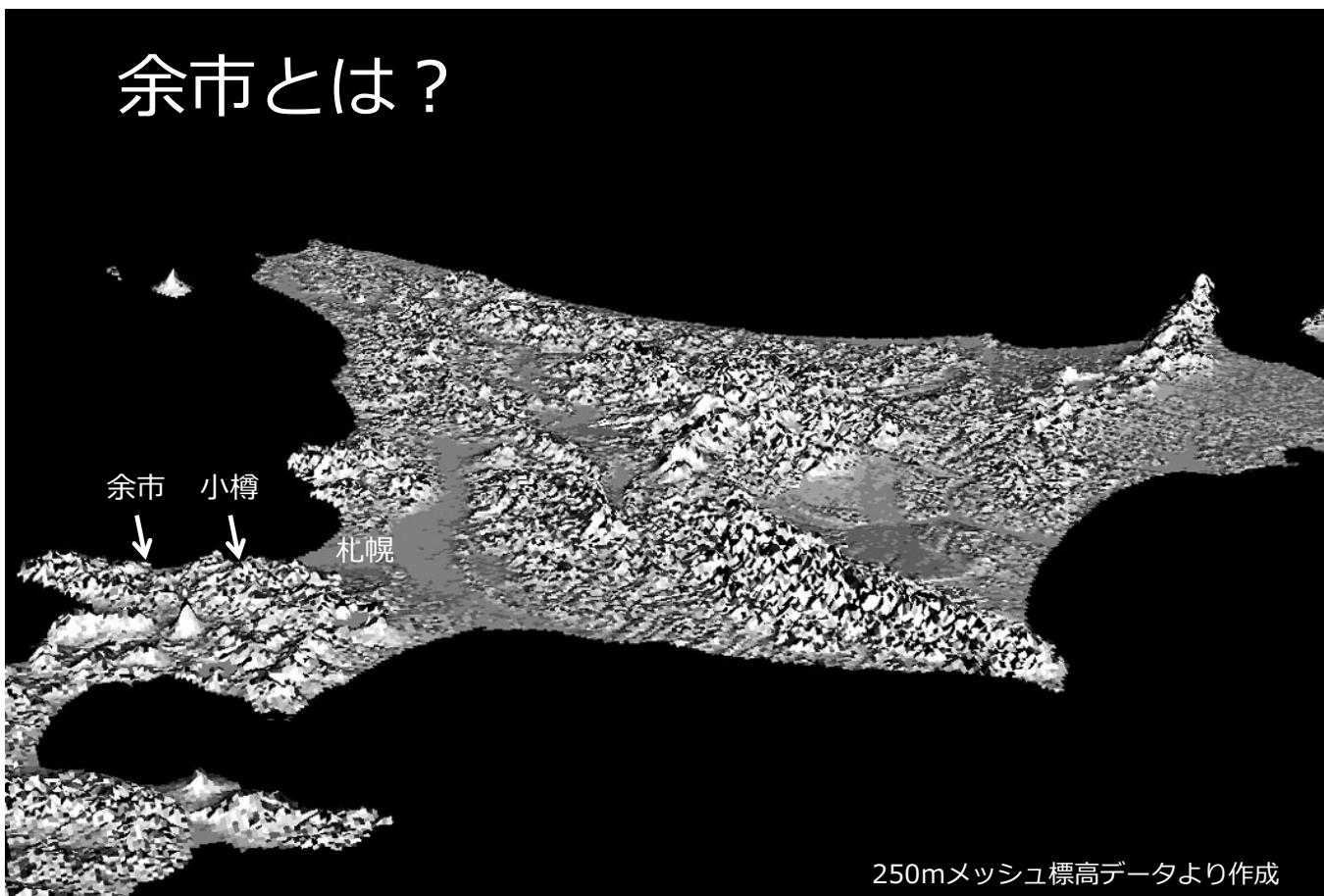
出典：北海道新聞  
2004年5月3日ほか

## 余市とは？

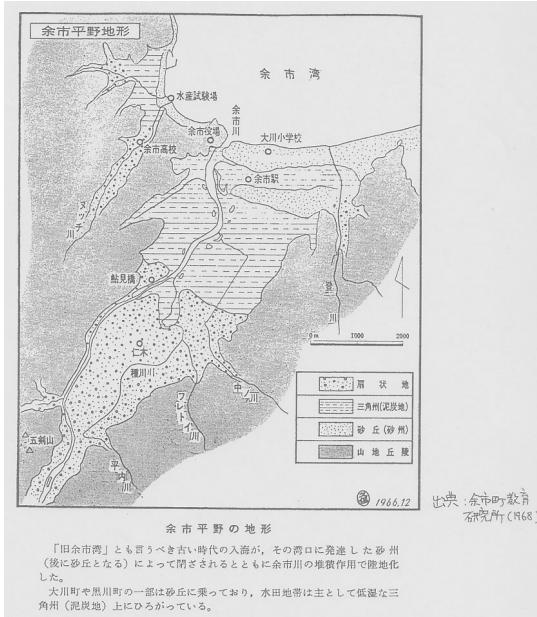
余市 小樽

札幌

250mメッシュ標高データより作成



# 余市町の地域性



- アイヌ語のイヨーティーン（蛇のように曲がった大きな川のある所）
- 安政時代（1854-1860）から町並形成
- ニシンが大量に獲れることから「①」と呼ばれた

出典：余市町教育研究所（1968）

## 「北日本の日本海側」地域におけるニシン漁



- [②]...ニシンの大群来集（3~5月頃）...  
[③]の[④]に産卵
- 積丹半島沿岸の岩場に100本近くの[⑤]
- 水揚げされたニシンの約85%は[⑥]に加工
- 米1俵=ニシン[⑦]1俵が等価
- [⑧]で関西方面へ（ミカン、茶、綿、藍栽培などの高級肥料）

出典：余市町ニシン博物館展示より

# 北前船（弁財船）のルート



- 3月初 大阪→5月初 北海道
  - [⑧]
- 7月北海道→11月頃大阪
  - [⑨]
- 一航海で1,000両を稼ぐ船頭あり
  - 現代版の定期「⑩」みたいな存在
  - 地域による[⑪]の違いを利用

加藤貞仁（2002）『北前船 寄港地と交易の物語』無明舎出版. 242p.



図18 1918年(大正7)の余市町  
(5万分の1地形図「小樽西部」大正5年、「仁木」大正6年測図、原寸)

図19 現在の余市町  
(5万分の1地形図「小樽西部」「仁木」平成3年修正、原寸)

出典：ニシンとリンゴのふるさと 余市町。

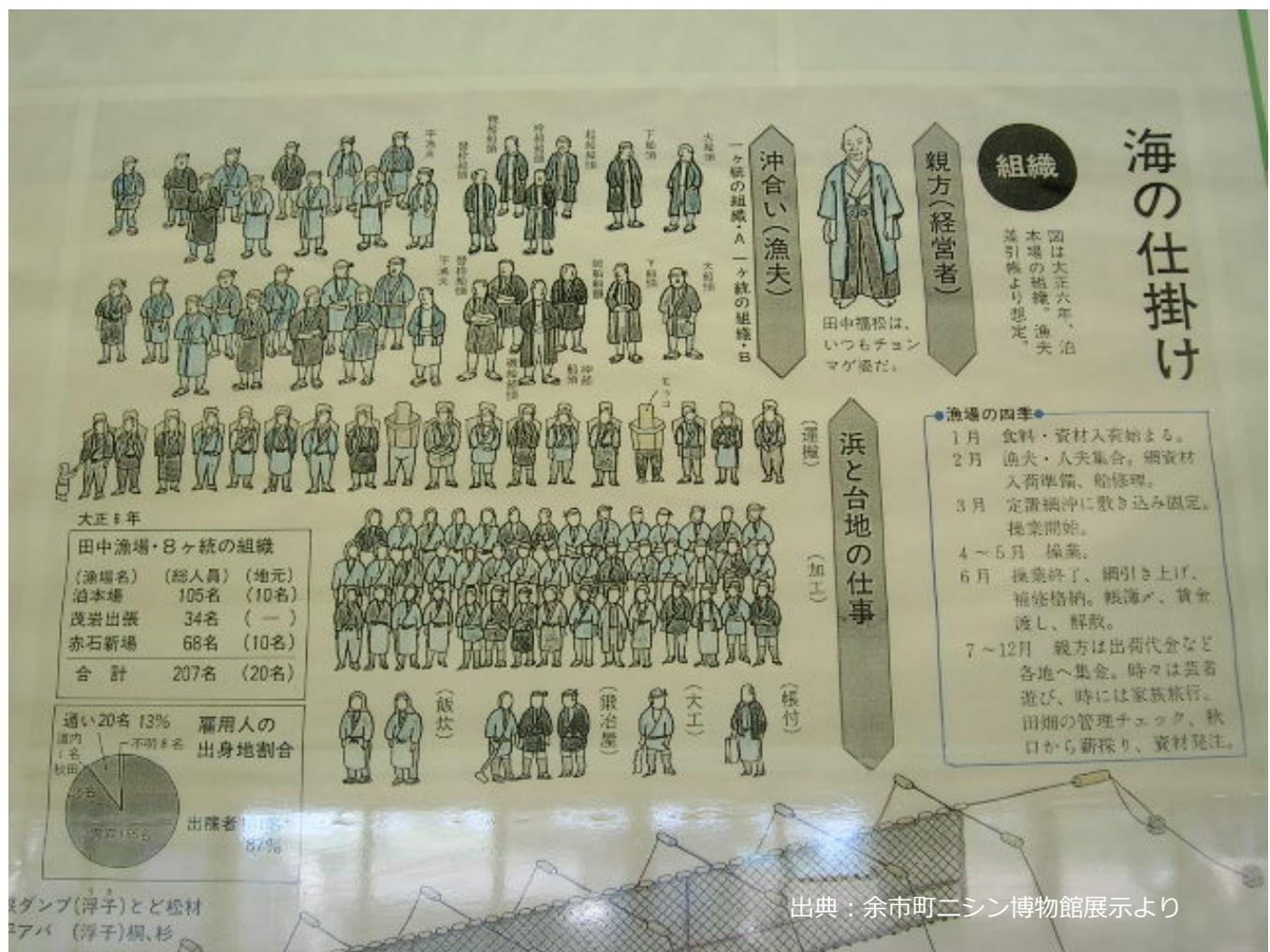
『北海道 地図で読む百年』平岡昭利編, 古今書院, 2001年。

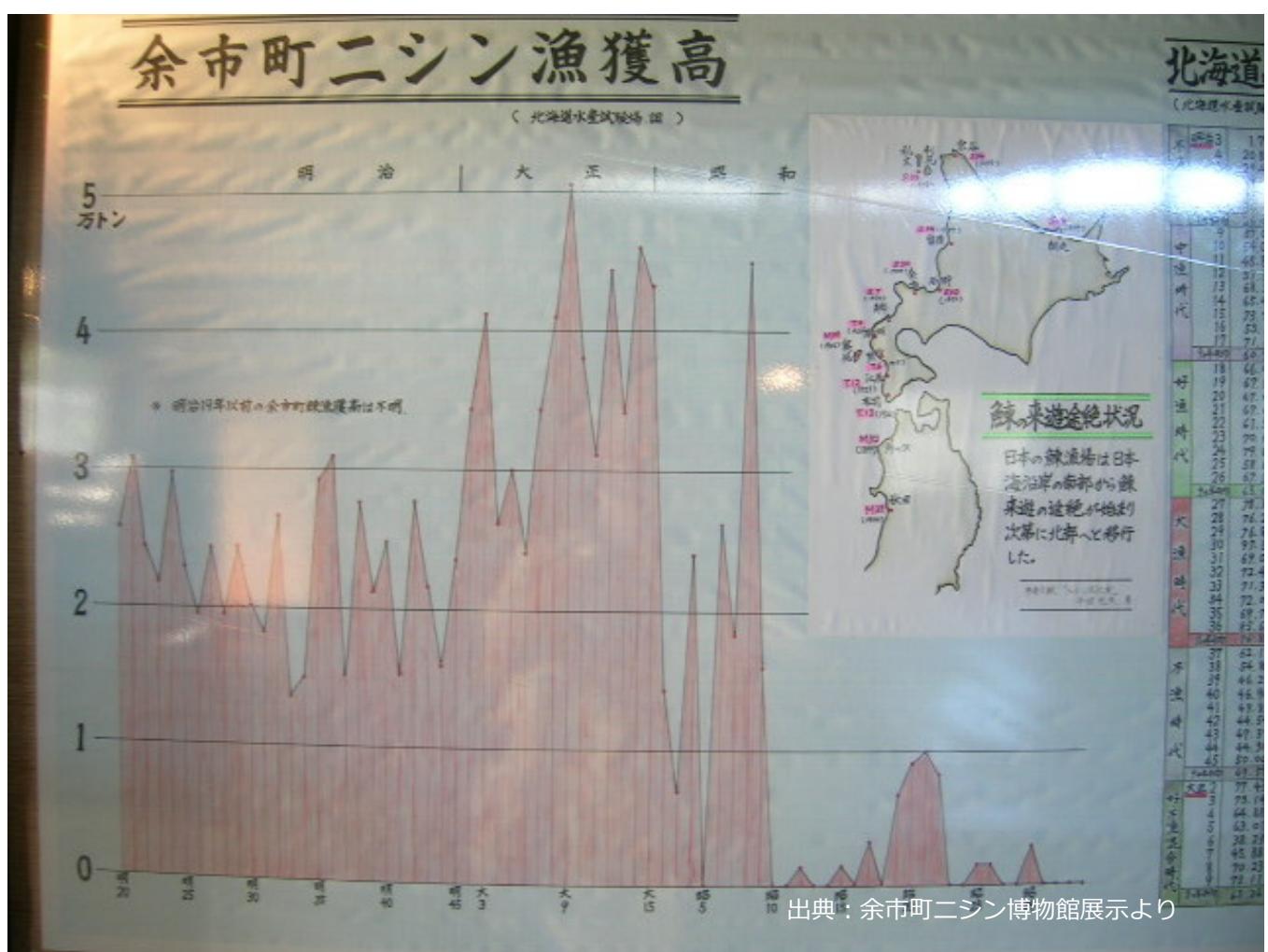
# 余市への出稼ぎ<sup>(13)</sup>（ ）の社会的要因

- ニシン漁は角網を用いた「<sup>(14)</sup>」単位で従事
- 浜での水揚げから陸での乾燥まで約[<sup>(15)</sup>]人の組織
- 漁期には[<sup>(16)</sup>]の東北3県を中心に2000人を越える出稼ぎ漁師（<sup>(13)</sup>）が余市に集結
  - 前年秋～冬にリクルート（正月資金を前貸し）
  - 貧しい家庭からのみではない・・・社会的な存在
- 漁場ごとに1日に約[<sup>(17)</sup>]円の収入（現在の貨幣に換算後）
  - 1876（明治9）年に余市で5万トン
  - 最盛期にはニシンは北海道だけで約90万トン（年）
  - 「江差の5月は江戸にもない」と謳われたほどの賑わい



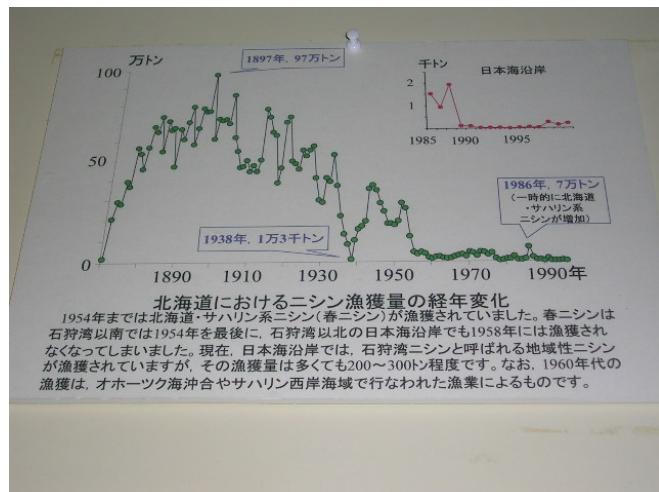
<http://esashi.sakura.ne.jp/rekimachiHP/shop/?p=388>





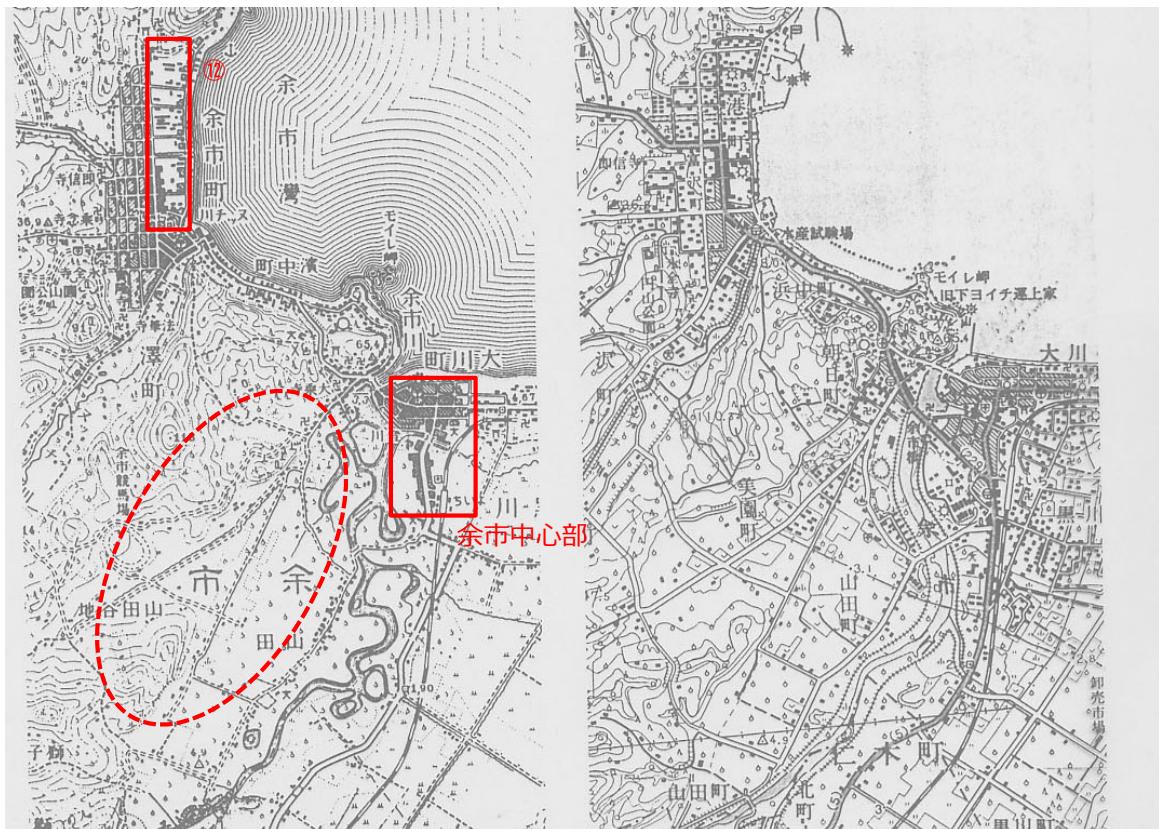
# Turning Pointとなつた 1903（明治36）年

- ①1903（明治36）年に  
〔<sup>18</sup>〕…爆発的販路拡大（東京、海外へ）
- ②明治36年の北海道85.6万トンがニシン漁獲ピーク
- 運命を分けた親方の性格
  - 〔<sup>19</sup>〕派
  - 〔<sup>20</sup>〕派



出典：余市町ニシン博物館展示より

## なぜニシン番屋の親方がりんご栽培？

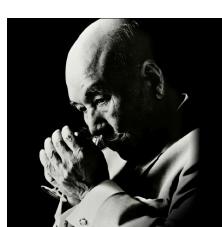


# 余市のリンゴ栽培

- 北海道開拓初期1875（明治8）年、黒田清隆北海道開拓長官がアメリカからリンゴの苗木を持ち帰り、1879年にわが国で初めて結実（札幌の農業試験場）
- 入植した会津藩士を中心に、毛利、阿波などからの[<sup>㉑</sup>]の手によってリンゴ栽培が拡大
- [<sup>㉒</sup>]を背景に、余市の丘陵地でリンゴ栽培を始める漁場親方がいた（[<sup>㉓</sup>]の仕事の確保・・・一部の親方の[<sup>㉔</sup>]）
- 明治後期から大正にかけて、ニシンもリンゴも生産拡大
  - 鉄道による輸送（東京方面）、[<sup>㉕</sup>]への輸出
  - ニシン漁の異変 1928（昭和3）、1930（昭和5）年
  - 相次ぐニシン番屋の廃業、漁網業者の倒産・・・

## リンゴ栽培の拡大とニッカ

- 1934（昭和9）『大日本果汁株式会社』設立
- 1935（昭和10）ニッカ林檎汁発売
- 1936（昭和11）ウイスキー生産開始
- 1940（昭和15）ニッカウヰスキー発売
- 1952（昭和27）ニッカウヰスキーに社名変更



日本のウイスキーの父 竹鶴政孝

写真の出典はすべて  
ニッカウヰスキーのホームページ